

女と欲望とロックと

— 『伝説のグルーピー』に見る女性の欲望の主体性—

荒木菜穂

(甲南女子大学他非常勤講師)

はじめに

「セックス・ドラッグ・ロックンロール」という、いまや半ば口にするのも恥ずかしいような、手垢のついた言い回しがある。ドラッグからはひとまずちょっと距離を置くとして、セックスとロックンロール。欲望や解放のイメージとも重なるこの二つの「文化」(敢えて文化と言いたい)は、私にとって大変魅力的でありながら、しかしながらフェミニズムの皮を被った立場から見れば、ともに男性中心主義的で女性排除的なイメージを持つものであり、時にはそれらに対し憤りさえ覚えることもあった。タテマエとしての男女平等を経た現代であるならば、どんな文化を嗜みどんな快楽を享受するかということにもはや性差はない、と棒読みで言い放たれる一方、ホンネの世界ではまだまだ、そうは言ってもロックは男のもの、女性がセックスの主体になることは好まれないというより気持ちの悪いジェンダーが社会を澁ませている。この二つの事象「のみ」が特筆すべき特徴を持つとは言い難いが、ロックとセックスは、ともに、女性はそれらへの欲望の積極的な主体とは位置付けられず、ときには客体ともされる、ホモソーシャルな娯楽の文化とみなすことができる。

セックスに関しては、フェミニズムの視点からは、「女性の性解放」は真の女性の解放にとっては諸刃の剣として扱われてきたことも事実である。女性が性的快楽を自由に求められるようになるということは、女性を快楽の対象としか見なさないような男性ジェンダーにとって都合のよい存在になることを意味するとして、女性の性的欲望を表だって問題化せず、生殖や女性の健康、または関係性としての性愛の問題としてのみ性を扱うフェミニズムがある種の主流となっていた。とはいえ、フェミニズムとは、「特定の動きではなく、男女の差異と平等、女性の同一性と多様性など、しばしば対立的主張を持つ様々な理論、活動が含まれ」¹るものであるゆえ、逆に、女性の性的欲望をフェミニズム的目的に合致すると捉える動きもみられる。フェミニズムは、その担い手のポジショナリティ、政治的方法や着地点の多様性があり、ときにはそれらは対立の様相を見せる。本エッセイでは、グルーピーという、女と性とロックの「ある関係性」に着目することで、その政治的解決法が定まらぬフェミニズムの 이슈において、その内部における個別具体的な事象の持つ政治的意味を考察することにより、概念的な対立で終わらない戦略の片鱗を見出していければと思う。どのような性解放であれば、男性中心主義的性文化への迎合であり、どのようなであればそれへの政治的抵抗となりうるのか。

グルーピーとは、1960年代に出現した、男性ロックスターを追いかけ、音楽と、彼らとの性関係を楽しむ女性たちのことを言う。しばしば、ロックスターの性欲の対象、娼婦的存在と見なされる一方、ロックファンとしての位置づけは、他の女性ファンと同様、音楽ではない部分でロックを評価する「二流のファン」とされてきた。ともに女性排除的な側面を持つ「性とロック」への欲望を持つ彼女らは、フェミニズムにとって男性ジェンダーへ迎合する存在であるのか、または主体性を確立しジェンダー構造から解放された女性であるのか。本稿で扱うグルーピーは非常に限定的であり、グルーピー文化を代表するものとは言い難い。しかし、ロックとセックスという、男性の解放の象徴であり欲望の象徴であった文化を楽しむグルーピーの生き方の一つの表象からは、女性の欲望の実現の持つフェミニズム的意義を我々に再考させるよう求めるきっかけを生み出すものであるように感じられる。

¹ 荒木菜穂「第二波フェミニズム」、大澤真幸・吉見俊哉・鷲田清一編『現代社会学事典』(弘文堂：2012.12)

1. サブカルチャーとしての性、ロック

(1) 解放の象徴としてのロック

ロックとは、ブラックミュージックなどをルーツに1960年代に発展した音楽ジャンルであり文化である。ロックはしばしば音楽の形態としてのみよりも、「定義の曖昧な『文化現象』として」²語られる。とりわけ、それ以前から続く若者文化が60年代に「正真正銘のラディカルな」³文化となった象徴的な現象として扱われた。若者たちは「仲間集団や中産階級の大人の規範にあからさまに反対」し、「下層階級の価値観やスタイルを取り入れた」⁴。

いわゆる「大人」の価値観や規範への抵抗は、若者文化の特徴として、近代の若者のアイデンティティの確立の問題とともに語られることも多い。当時のイギリスのロックバンドThe WhoのMy Generationでは、「大人たちは俺たちを押さえつけようとする (People try to put us down)」「老いぼれる前に死にたいぜ (I hope I die before get old)」と若者世代の代弁のような歌詞が叫ばれた(もっとも彼らのうち二人は「老いぼれ」た今でも元気に活動しているが)。若者文化において音楽は重要であり、「ロックンロールはその音楽の中でも最も人気の高い」⁵ものであった。大人世代の理解できない「価値観やスタイル」の音楽も、婚姻制度に縛られず快樂の性を享受する新たな性文化も、いわば「家」や、体制、家父長制への一種のカウンターとして存在していた。

(2) ロックと男性文化

しかし、既存の価値観への抵抗やそこからの解放を意味するロックやセックスは、あくまで男の若者の文化であった。女の若者は、より家父長制に縛られる立場にあった。外出にたいし親が目を光らせ、家庭内での女性役割を期待され、実際に若者文化の場である「ストリート」を歩き回することは若い女性にとっては危険なことであった⁶。そこで女の子たちは主に家庭内でレコードを聴いたり雑誌を楽しんだりしていたという⁷。女の若者は、ロックを含む若者文化から締め出されていた。また、ロックを好む場合でも、音楽性よりもロックスターの「個人のパーソナリティ」に関心を持ち⁸、演奏や音楽性、セクシュアルなパフォーマンスの魅力に関心を持つ男性とは、異なる消費を行っていると言われる。また、この時代になり、両親の決めた相手と結ばれるのではなく、結婚相手を自分で見つけるという自由という価値観が男女ともに登場したが、同じく「家」からの自由を意味する性の自由に関しては、女の子の自由は快樂の相手を見つけた自由ではなく、あくまで新たな「家」に落ち着くための「夫を見つけていることが問題」⁹になる。

ロックは歌詞の内容、作り手、サウンドのあり方など様々な側面において男性性の文化であると見なされ、ジェンダー的視点での研究も数多くなされてきた¹⁰。ロックの送り手側での女性の立ち位置は、ロックをコントロールする作り手(演奏者、歌詞の書き手など)ではなく、あくまで女性性を帯びた「歌手(ディーヴァ)の役割」¹¹であり、また受け手としても、前述のようなスター個人の魅力を愛し「ルックスに心ときめかす」女性のロックファンは「音楽がわからない」¹²とされてきた。北川純子は、女性とロック文化についての先行研究の

² Frith, Simon, 1983[1978], *SOUND EFFECTS : Youth, Leisure and the Politics of Rock 'n' Roll*, Constable (細川周平・竹田賢一訳『サウンドの力』晶文社 : 1991. 10, 23)

³ 前掲書, 128

⁴ 前掲書, 128

⁵ 前掲書, 240

⁶ 前掲書, 265-266

⁷ 前掲書, 265-266

⁸ 前掲書, 267

⁹ 前掲書, 269

¹⁰ 北川純子「日本のポピュラー音楽とジェンダー」への展望(北川純子編『鳴り響く<性>』勁草書房 : 1999. 9, 9-10)

¹¹ 前掲書, 9

¹² 前掲書, 10

中にインターネットのメーリングリストから女性ファンが排除される構造についての分析を紹介しているが¹³、おそらく類似の空気は私自身も数年前に「2ちゃんねる」掲示板にて経験している¹⁴。

快樂のための性の自由の文化、ロックを楽しむ文化の双方の主流から、女性の若者、少女たちは排除されてきたが、しかしながら排除と同時に一定の役割をも担わされてきたことは確認しておく必要がある。少なくとも快樂の性は、異性愛関係である場合は男性のみならず相手の女性を必要としたわけである。その際、次でも述べるように、女性は、性から遠ざけられる「良い」女性（妻、母的存在）と、男性の性欲の対象となる「悪い」女性（娼婦的存在）とに分断される（裏を返せば男性にのみ快樂の性を許し女性には許さない）という性の二重基準が見られる。すなわち、快樂の性を享受する文化から排除される女性と、前の時代ほどではなかったにせよ、世間から蔑まれ、また男性の性にとって都合のよい存在としていわば「客体」としてそこに取り込まれる役割の女性が存在した。本稿で注目するグルーピーの存在も、多くは「自立的なセクシュアリティをもたない人間」¹⁵と捉えられてきた。また、「二流のファン」「ミーハー」と馬鹿にされる女性ファンたちが、関連商品も含めてのロック産業を支えていたことは言うまでもないだろう。

しかし、排除されながらも、都合よく「取り込まれる」女性たちは、それでは、セックスや資本主義社会の物言わぬ客体でしかないのだろうか。男性中心主義的構造（フェミニズム的文脈での家父長制）も資本主義も、ちょっとやさそとのことではおそらく動じない巨大な力を持っているだろうし、確かにそう言える側面はあると思う（もちろん資本主義に関しては男性ロックファンも）。しかし、女性たちが、ロックを楽しみたい、セックスを楽しみたい欲望、すなわち女性が主体的に欲望を持つという選択肢は、それではどうすれば実現可能であるのか。2では、女性の性的主体性をめぐるフェミニズム的議論について紹介し、フェミニズムはその目的において女性の欲望を重要なものとして扱うべきであるという私自身の立場を述べていきたい。

2. 女性と欲望

（2）性の二重基準（ダブルスタンダード）の発見

1でも述べたとおり、フェミニズム、中でも1960年代に勃興したラディカル・フェミニズムの大きな功績の一つに、男女の性の二重基準があることを明らかにしたことがあった。繰り返しになるが、性の二重基準とは、女性には家庭内での生殖の性のみを求め、男性にのみ家庭外の快樂の性を求めることを許すしくみを意味する。そのため、女性は、性欲を持たず産むことしかしない妻・母的女性と、男性の性欲の相手となる娼婦的女性（もっとも私自身は売春と女性の性的主体性は両立しうると考えている）、とに分断される。この女性の分断の構造は、妻・母的女性同士、娼婦的女性同士の間にも、よりよい男性をめぐる敵同士という関係性として作られる（支配者は被支配者を分割して統治せよ、というセオリーどおり）。

この二重基準への批判的視線は、日本では、日本の第二波フェミニズムであると言われているウーマン・リブの主張の中にも見て取れる。田中美津は、当時ビラとして撒かれた「便所からの解放」の中で「男にとっては女は母性のやさしさ＝母か、性欲処理機＝便所か、という二つの存在としてある」「現実には結婚の対象か、遊びの対象かという風に表れる」「女は、やさしさと自然な性欲を一体として持つ自らを裏切り抑圧していく」として、女性を人間ではなく部分として扱う性の構造に対する的確な批判を繰り返して、それへの抵抗のための

¹³ 前掲書、10

¹⁴ 文中にも紹介したThe Whoの単独来日公演（2008年）の際のファン同士の交流での出来事。日本のファンの声をアーティスト側に伝え来日に向けファン全体を盛りあげるなどの積極的で主要な活動が女性ファンらによるものだったのにもかかわらず、女性をミーハー扱いし（おそらくはバンドメンバーと関係できる多少の嫉妬もあったのだと思うが）、女性ファンがバンドを語ることで自分たちの青春時代（おそらく60年代、70年代）の思い出を汚されるかのような物言いをした（おそらく）男性たちとのやりとりの経験（詳細は、荒木菜穂「とあるフェミニストの『洋楽萌え』体験記—あるいはアメイジング・ジャーニー」『年報「少女」文化研究2』「少女」文化研究会：2007、114-123、または「日本女性学研究会ニューズレターVoice of women」2008年12月号に掲載）。

¹⁵ Frith, Simon, 1983[1978], *SOUND EFFECTS: Youth, Leisure and the Politics of Rock 'n' Roll*, Constable (細川周平・竹田賢一訳『サウンドの力』晶文社：1991.10, 283)

運動の重要性を訴えている¹⁶。

ちなみに、ウーマン・リブの運動の中では、多くのミニコミ誌が作られ多くの女性たちの声が綴られてきたが、やはり時代的なものか、その中にはロックについて書かれたものもある。1970年代に入ってからのものであるが、1972年のミニコミ『炎』では、ローリング・ストーンズのボーカル、ミック・ジャガーについて、「ミックはアンドロギュヌス（両性具有）の如く男にも女にも肉体をさらしていく」、など、そのセクシュアルな魅力について性別を超えた存在であるゆえのものとして讃える文章¹⁷が掲載されている。ちなみにローリング・ストーンズは、その歌詞の内容からかしばしば女性差別的なバンドとしてフェミニストから嫌われるが（女性を「舐める」DVのような Under My Thumb など）、ミック・ジャガー自身も90年代に入ってから『ミュージック・マガジン』誌での作家五木寛之との対談で、（おそらく時代的なタテマエがあったのだろうが）フェミニズムについても配慮していかないといけない、のように述べている¹⁸、前述のような70年代のウーマン・リブの中にもミック賛美があったことは興味深い。また、1973年の『女から女たちへ』では「ロックは男のもの？」と題し、当時の「ニューミュージックマガジン」誌上（前述の『ミュージック・マガジン』の前身誌である）の女性とロックに関する特集への苦言が呈されており¹⁹、1978年の『女一匹どこへいく』では「私とROCK」という連載コラムにて、「ロック的なものとは、音楽の一種ではなく、ある人の内部からつきあげてくるものが噴出したもの」と、ロックの力に触発されリブのミニコミを発行するに至った経緯が述べられている²⁰。

（2）フェミニズムと女性の欲望

性の二重基準に戻ると、この場合のフェミニズムの文脈では、女性が自らの快楽のために性的に解放されても、それは男性の性にとって都合のよい、いわば娼婦的女性を増やすだけだ、として、真の性的自立にはならないと見なされることとなる。

女性の性的欲望については、前述のウーマン・リブにおいてさえ真正面から向き合うことが避けられている。田中亜以子は、ウーマン・リブのミニコミを分析する中で、リブにおいては女性が自らの快楽のための性的主体になることには言及されず、「コミュニケーション」としての性関係を重視する主張が多くを占めていたことを明らかにしている²¹（田中 2007 97-117）。もっとも、この場合のコミュニケーションとは、近代家族的な男女非対称な「愛」の規範とは異なるものであり、女性の能動性を示すものであることには触れられているが、性的快楽や欲望に焦点が絞られなかったことについては、女性の性にたいし欧米以上に偏見の目が向けられる日本ならではの事情があったのではないかと述べている。

1960年代の欧米のフェミニズムでは、「女性が『セックスを歓ぶ権利』を求めることは、ベッドの中まで貫徹する男性優位を覆す上で、政治的に重要な位置を占めていた」²²というが、このような立場のフェミニズムはその後のフェミニズムの潮流の中では主流とはなりえなかった。例えば、1980年代のポルノグラフィの暴力性をめぐる議論の中では、ポルノ規制派、男女のセックスそのものの暴力性を訴えるフェミニズムが力を持ち、ポルノグラフィ賛成派のフェミニズムとの間には議論が起こった²³。

¹⁶ 田中美津, 1970, 「便所からの解放」(『いのちの女たちへ とり乱しウーマン・リブ論 新装版』現代書館 : 2001. 7, 338)

¹⁷ 舟本恵美「エロスの復権 パイ・セックスにみる解放された性」『炎 3』1972. 11 (溝口明代・三木草子・佐伯洋子編『資料日本ウーマン・リブ史 (2)』松香堂書店 : 1994. 1, 294-297)

¹⁸ 『ミュージック・マガジン』'90年4月号

¹⁹ 「ロックは男のもの?」『女から女たちへ8』1972. 5 (溝口明代・三木草子・佐伯洋子編『資料日本ウーマン・リブ史 (2)』松香堂書店 : 1994. 1, 323)

²⁰ 高橋栄子「私とROCK」『女一匹どこへいく 1』1978. 6 (溝口明代・三木草子・佐伯洋子編『資料日本ウーマン・リブ史 (3)』松香堂書店 : 1995. 9, 248)

²¹ 田中亜以子「ウーマン・リブの「性解放」再考—ベッドの中の対等性獲得に向けて」(日本女性学研究会女性学年報編集委員会『女性学年報 28』2007, 97 - 117)

²² 前掲書, 105

²³ Snitow, Ann and Pat Califia et. al., 1986, *Caught Looking: Feminism, Pornography & Censorship*, New York: Caught Looking, Inc. (藤井麻利・藤井雅実訳『ポルノと検閲』青弓社 : 2002. 9)

また、1990年代になると、第二波フェミニズムの批判的継承を目指す第三波フェミニズムと呼ばれる様々な現象が起こるが、その中でも「現在の」フェミニズムにおける、女性の性的欲望（および権力や金銭的欲望）の軽視が問題化される。男性中心主義的価値観の否定が背景にはあったのであろうが、これらの欲望からなるだけ清廉潔白であろうという空気がフェミニズムの中には存在した²⁴。このことにたいし第三波フェミニズムと呼ばれる言説の中では、それは外部からのイメージであるとして「フェミニストはいまだ、しばしば耳障りで、男嫌いで、魅力のないものであり、そしてレズビアン」であるという偏ったイメージで考えられている²⁵という主張も見られるが、女性自身が暴力的なポルノグラフィを見て性的興奮を覚える現実と、フェミニズム的な「女性への暴力」としての性への批判を内面化する自分との矛盾に苦悩する様子²⁶が示される例もある。また、女性が欲望を持ち、力を持つことを否定するフェミニズムにたいし、それを「犠牲者フェミニズム」であると批判し、金、権力、そして性的欲望を持つ重要性について述べるナオミ・ウルフによる主張²⁷も見られる。

（3）主体化か客体化かの二元論を超えて

女性も男性同様に性的快楽の権利を求める主張にたいしては、前の世代のフェミニストからは、「女性全体ではなく、より経済的な機会のある白人中産階級女性にのみ当てはまるもの」²⁸（Heywood 2006, x vi）として、また、男性との関係においてリスクを負うことの少ない恵まれた環境から発せられたものであり、それにもかかわらず、そのような安全な環境を作り上げてきたはずである第二波フェミニズムを否定する動きであるとして批判される²⁹。

しかしながら前述のウルフは、やみくもに女性の性的快楽の自由を求めていたわけではない。ウルフは、男性に定義されるのではない女性の性的快楽のためには、男性の視点による「性革命」とフェミニズムが批判してきた従属的な性としての女性のあり方しか性のお手本を知らない若い女性たちにたいし、上の世代の女性が自らの実際の性体験を語るべきであると述べている³⁰。そして、ポリティカルコレクトネスなフェミニズムとしての正しさではなく、女性の性欲を肯定した上での多様な経験に基づいた性体験のあり方、具体的にはペッティングの方法、性病予防や避妊の知識の獲得などを共有することが女性のセクシュアリティにとって必要であると主張する³¹。

これらのウルフの主張は、完全に賛同することはできないものの、フェミニズムにとっての女性の欲望の意味を考える上で一つのヒントとなるのではと私は考える。すなわち、女性の性的欲望をはじめとする「欲望」を、ジェンダー構造に再び巻き込まれることなく実現するためには、このような具体的実践や、それらの持つジェンダー構造への働きかけ、政治性を明らかにしていくことが重要なのではないか。そこで、本稿では、男性の性的欲望の対象、ロックの二流の聴き手として、ジェンダー構造の中でも、フェミニズム的にも力を持たぬ存在とみなされてきたグルーピーの活動の側面に光を当てることで、そこにフェミニズムの実践や政治性を見出すことができないかと考えていきたい。

²⁴ これは、（前述の田中の主張とも一部重なるが）日本のフェミニズムにも感じられることであり、今後より問題化していきたいと思っている。

²⁵ Findlen, Barbara, ed. 1995. *Listen Up! Voices From the Next Feminist Generation*. Seal Press, x v.

²⁶ Minkowitz, Donna, 1995 "Giving it up", Rebecca Walker. *To Be Real: Telling the Truth and Changing the Face of Feminism*, Random House.

²⁷ Wolf, Naomi, 1993, *Fire With Fire: The New Female Power and How It Will Change the 21st Century*, Random House, 136.

²⁸ Heywood, Leslie. 2005. Preface. *The Women's Movement Today: An Encyclopedia of Third Wave Feminism*. Greenwood Press, x vi.

²⁹ Oakley, Ann, 1997 "A Brief History of Gender" *Ann Oakley and Juliet Mitchell, Who's Afraid of Feminism?: Seeing Through the Backlash*, New Pr, 47.

³⁰ Wolf, Naomi 1997 *Promiscuities: the secret struggle for womanhood*, Random House（実川元子訳『性体験』文藝春秋：1998.3）

³¹ 前掲書。

3. 伝説のグルーピーから見てくるもの

(1) ミス・パメラという女性

『伝説のグルーピー』(原題 *I' M WITH THE BAND*) は、パメラ・デ・バレス (ミス・パメラ) により 1988 年に書かれた自伝的著作である (邦訳は 1994 年)。グルーピーとして有名、というある種の特殊な立ち位置からという意味では、1960 年代やその後の時代のグルーピー文化を代表する文献であるとは必ずしも言えないが、男性ファンからは蔑まれ、女性ファンからも侮蔑の目で見られがちなグルーピーという存在についての、いわば当事者の側からの声であると言える。また、著者は当時のグルーピーの中でも中心的な存在であり (映画『あの頃ペニーレインと』のモデルともなり、現在の SNS などでの肩書も *legendary groupie* である)、かつ自らの主張を外部に発信できる立場にある。すなわち、自律せぬ性の犠牲者、ロックの二流の聴き手とされてきた当事者が、自ら主体的に語ったメディアとして本書は位置付けることができる。それゆえ、本書を読み解くことにより、彼女を含む彼女らは本当に犠牲者であったのか、二流のファンであったのか、おそらくそうではなかった側面を見つけることで、名誉の回復とともにグルーピー文化の再評価を試みる事が可能である。

ミス・パメラは、1948 年カリフォルニア州生まれで、主に 1960 年代から 1970 年代にかけ、数々の有名ロックスター (The Doors のジム・モリスン、The Rolling Stones のミック・ジャガー、Led Zeppelin のジミー・ペイジやロバート・プラント、The Who のキース・ムーンなど) と性的な関係を持ち、かつそれらのバンドの熱心なリスナーでもあった。また、自らも、フランク・ザッパのプロデュースによるグルーピーらのみのバンド *GTO's* のメンバーとして一時期には活躍 (ミス・パメラという呼称は *GTO's* のメンバーとして公表されていたもの) し、Silver Head のボーカル、マイケル・デ・バレスと結婚する。現在ではライターや様々な企画のコーディネイターとして活躍し、また女性たちを対象にした文章の講座も定期的に開催している。

『伝説のグルーピー』は、当時の彼女の日記をベースに、現在 (80 年代後期) からの回想録を加えた形で構成されている。彼女がしたいにロックや性に目覚めていく様子が力強く華やかに描かれ、また、余韻もなく次から次へと様々な出来事が華やかに繰り広げられる様子、ロックやロックスターと向き合う際の彼女のテンションが惜しげもなく伝えられ、読んでいて本当にエキサイティングに感じる本である。実際にロックスターとの性関係を持つ様子も赤裸々に描かれ、セクシュアルな内容でもある。

(2) 欲望の対象としての男性

まず、彼女の持つ主体的欲望については、展開されるそれぞれの場面のベースにあるものとして頻りに描かれている。それは、ロックを聴いたり体験したりする欲望であり、ロックスターの肉体への欲望であり、また、男性を美的に愛でる描写も数多く登場する。

グルーピーとして様々なバンドと交流する以前に観たローリング・ストーンズのライブについては、「ミックはものすごくセクシーだった／それは掛け値なしに淫らで、オーディエンスの女の子たちは思わず自分たちの大切なところを突っつかずにはいられなかった」と綴られている³²。ロックスターの「ペニスのパワーのマスターベーション的な祝福」から女性ファンは排除されていた、との論もあるが³³、ファンとしての層は異なるにせよ、女性ファンもまた、ロックの性的魅力に酔いしれていた。同時に、彼女は決してロックスターのルックスのみに惹かれていたのではなく、その音楽的魅力についても大いに語り、さまざまな音楽ジャンルのバンドのライブに足を運んでいる。また、後述するように彼女には処女へのこだわり (中産階級出身ゆえの近代的価値の内面化か) があり、いわゆる挿入のプロセスのある性交は何人もの男性と性的関係を経てから経験する。しかし、その事実は彼女の性欲の描写にはほとんど影響を持たない。「たくさんのサテンのズボンに顔を埋めた

³² Des Barres, Pamela, 1988, *I' M WITH THE BAND*, Jove (近藤麻里子訳『伝説のグルーピー』大栄出版 : 1994. 7, 46)

³³ Frith, Simon, 1983[1978], *SOUND EFFECTS : Youth, Leisure and the Politics of Rock 'n' Roll*, Constable (細川周平・竹田賢一訳『サウンドの力』晶文社 : 1991. 10, 268)

くせに、まるでそこにツタンカーメンの秘宝でも隠れているかのように処女だけは手放さなかった」³⁴「ジミ・ヘンドリックスとエクスペリエンスがもうじき街にやってくることを知っていたわたしは、ノエルを自分のリストの第二の男性にしたいくて病院のベッドの上(注・肝炎での入院中)で歯ぎしりをしていた」³⁵というように。また、「ああ、あたしはあの人のからだ中を、上になったり下になったりして動き回ったの」³⁶という記述からは、男性に自分の身体を「動き回」られたのではなく、自分が主語になりセックスを楽しんでいる様子が読み取れる。

さらに彼女は、視線の客体の女性ではなく、男性の美や性的魅力を主体的に視て、愛でている。Iron Butterflyのダリル・デローチにたいしては、「キラキラしたピンクと白のサテンの服を汗でぐしょぐしょにして、まぶしいライトにやせた胸をさらすのが、彼の濡れた魅力の一番のポイントだった」³⁷、「ダリルを見たとき、あたしはパンティが濡れるほどゾクゾクしちゃったわ／あのすてきなペニスを握りしめそうになる自分を必死で止めなくちゃならなかったくらいにね」³⁸。Steppenwolfのニック・セント・ニコラスについては、「からだの線を見たくてシーツをおろしたの、胸のところで両手を組んでいるあの人の姿といたら」³⁹など。

ステージの上でもそこから降りてもある程度ナルシスティックにふるまうロックスターが相手だったからこそ成り立った、ジェンダー非対称が逆の視線の関係だったかもしれないが、主体的に「見る」女の表象は、根強いジェンダー非対称的な美の秩序においてはやはり意義深いと感じる。また彼女は、「あたしはミック・ジャガーとおねんねして、バリトウ・ブラザーズと空を飛んで、世界的に有名になりたいの」⁴⁰、「もしかしたらあたしたちは最初の女の子だけのロックグループになって、自分たちのグルーピーを引き連れて、世界的に有名になれるかもしれないのよ」⁴¹といった、名声や金銭への欲望も隠さない。

主体的に男性の身体を「見」て美を愉しみ、自らの性的欲望の実現や社会的成功のために主体的に動く様子は、ともすれば、ジェンダーや資本主義による権力構造からの不利益を受けない恵まれた層の言い分であり、それらの構造に都合よく利用されるだけである、というフェミニズム的批判が生じうることも容易に推測できる。しかし、欲望の実現は権力構造の犠牲者化を意味するという古くより続く議論は、ともすれば女性の主体性を奪ってしまうことにもなりかねない。欲望の実現の持つ政治的意味を問うには、同時に現在の権力構造をどう認識しているのかについても見ていく必要がある。

(3) 性の二重基準やジェンダー規範への疑問

彼女がいわゆる「処女を捧げた」のは、当時夢中になっていた、前述の Steppenwolf のニック・セント・ニコラスであったが、彼は彼女の初めての「性交」後、冷酷な態度をとる。それにたいし彼女は「くずが、墮落が、梅毒が、淋病が、麻薬が、フェックが、ばかな男の子たちが、メセドリンが、自分のペニスと麻薬のことしか頭にないやつらが、はびこっているわ」と怒りを示す⁴²。また、自分に甘く女性に厳しいという別の男を相手にしたときには、「彼のもじゃもじゃの眉毛のあたりには、男は許されても女はいけないというダブル・スタンダードがのぞいていた」⁴³と述べている。結局彼女はこの男性ときちんと批判的に向き合うことなく傷つき関係が終わるが、ロックや他の男性との関係など次々と他の快楽を愉しみ、一人の男のみ依存し続けることはない。中途半端ではあり、怒りとそれを表明できない自分との間で揺れ動く(ウーマン・リブの言葉でいう「と

³⁴ Des Barres, Pamela, 1988, *I' M WITH THE BAND*, Jove (近藤麻里子訳『伝説のグルーピー』大栄出版: 1994. 7, 70)

³⁵ 前掲書, 149

³⁶ 前掲書, 125

³⁷ 前掲書, 71

³⁸ 前掲書, 145

³⁹ 前掲書, 116

⁴⁰ 前掲書, 163

⁴¹ 前掲書, 138

⁴² 前掲書, 121

⁴³ 前掲書, 258

りみだし」に近いかもしれない) 気持ちもあり、本書から知る限りは結果的には抵抗らしい抵抗はできていないが、フェミニズム的価値観を経た少女の感情がそこにはあったと見なしてもよいのではないだろうか。

彼女の参加するバンドGT0'sの歌詞やインタビュー記事からは、より、既存の価値観に抵抗的な彼女らの性に関する考え方が垣間見られる。ロックスターと寝るだけの頭の悪い女たちとの世間からの非難にたいしては、雑誌インタビューの中で、「ミュージシャンたちっていうのは、本当はとても知的な人たちで、あたしたちもそういうふうには彼らを扱ってわ——種馬としてじゃなくってね。そんなことをしたら自分たちもあの人たちも非人間的に扱うことになるもの」⁴⁴と、性の主体としての立場からの自論を展開し、しかし、後に、ミック・ジャガーについてはミス・パメラは、本音では「種馬のように扱いたかった」と述べている⁴⁵。少し文脈は違うが、性の二重基準の逆バージョンのようでもある。

また、GT0'sの歌詞においても、「あたしは会いたいと思った人にはだれでも会うし／なりたいたいと思う人間になる／見つけたいと思う宝物もみんな見つける」(The Ghost Chained to the Past, Present, and Future (Shock Treatment))⁴⁶と歌われる。さらには、性欲に支配された男性たちへの蔑んだ気持ちを歌った歌(The Moche Monster Review)⁴⁷、ロックスターの知り合いが多いことを餌に女性をナンパし続ける友人男性を「やらせてくれよ やらせてくれよ／あなたがミック・ジャガーを紹介してくれたらあたしの妹を紹介してもいいわよ」とユーモアを交え歌った歌(Rodney)⁴⁸は、男性の性を前にして女性が黙り込むのではなく、それらを女性の口から語るという主体性を示している。

(4) 女同士の絆とエンパワー

ミス・パメラの考え方や行動は、常に友人のグルーピーの女性たちとともにある。男性に酷い扱いを受けたときや失恋時には友人が慰め、あるアーティストの家でポルノまがいのショーが行われた後に、その場にいた見知らぬ女性が「それは不快だ」と口に出して言うのを目にして、彼女に親近感を抱き深い友人となる⁴⁹。特に後にGT0'sのメンバーになる親密なグルーピーたちとは、多くの女性が集まっても「いつでも真ん中にわたしたち5人がいて、手をつなぎあって、まわりで見ている人間たちを刺激したり反発させたりしようと企んでいた」⁵⁰。彼女一人で社会と向き合う様子よりも、GT0'sとして言葉を発するときのほうがよりメッセージ性が強いのは、プロデュースされた存在、対メディアということが大きいだろうが、女性同士の絆でもってのエンパワーが多少なりともプラスに作用していたのではないかと感じる。また、彼女に刺激を与えた重要な人物として、通称「石膏のシンシア」と呼ばれる女性がいる。彼女は、自分が性関係を持った男性ロックスターのペニスを石膏で型取り芸術作品にするという活動を行っている(現在でも)芸術家である。この活動自体、女性が、身体の一部として対象化され、意志を持った個人として扱われないジェンダー構造へのアンチテーゼとも捉えられ、十分にフェミニズム的である。パメラはシンシアの活動を尊敬し、またロックスターへの欲望を共に語り合い共有した⁵¹。彼女らが初めて電話で会話をした音声GT0'sのアルバムに収められている(Miss Pamela's First Conversation With the Plaster Casters Of Chicago)。この曲を初めて聴いたとき、私は、男性の作り手による覗き見的な趣味かとあまり好ましく思わなかった。しかし、よく聴けば彼女らの声はとても嬉しそうで、自立した女性同士がその経験を共有できる喜びが生まれた瞬間の記録だと捉えるならば、本人たちの同意のもとでこの様子が後世に伝えられたことは意義深いことだったのではないかと今では感じている。

⁴⁴ 前掲書, 232

⁴⁵ 前掲書, 232

⁴⁶ 前掲書, 145

⁴⁷ 前掲書, 151

⁴⁸ 前掲書, 141

⁴⁹ 前掲書, 99

⁵⁰ 前掲書, 109

⁵¹ 前掲書, 154

結局は、ミス・パメラは対幻想的に運命の相手を求め、見つけ、結婚する。結局は女性の性解放は結婚相手を自分で見つけるための方法、という構図にあてはまると捉えられなくもない。また、自由奔放な欲望の一方で、家庭を持った女性への憧れや結婚への願望の記述もしばしば見られた。彼女が20代半ばとなったとき、後続の10代のグルーピーたちに年寄り扱いされ、それゆえ、誰か特定のロックスターの妻の座に収まることでロックの場に居場所を確保し続けようとする様子も、女性同士の絆どころか、古くからの女性の分断、最近では女カーストと呼ばれるような構造を如実に示して胸が痛くなる。また、無自覚な差別意識が著作や歌詞から垣間見られることにも真摯に向き合わないといけない。

とはいえ、ジェンダー構造への疑問、抵抗、女性同士の連帯、その上での女性の欲望の主体性など、女性が欲望を持って動く際の重要なファクターが本書には随所に見られることは事実である。だからといって、このケースに限定したとしても、こういう要素があるからグルーピーは完全に主体性を確立していた、と言い切りたいわけではない。女性の欲望は、権力構造への抵抗する側面「も」を持っていて、それらは再考に値する。私が言えるのはここまでである。

4. 男性中心主義的社会の呪縛もフェミニズムの呪縛も超えて

(1) 欲望する女性を現実的なものにするために

北原みのは1990年代より男性中心主義的ジェンダー構造に囚われない形で女性の欲望についての議論を続けてきた論者であるが、近年、「自由に生きていたって、幸せになれるわけじゃないし。セックスは自由の象徴ではなく、お仕事、または、カレとの関係を深めるための技術なんだし。そんな女の子の声が聞こえてくるような気がしていた」⁵²と、90年代にはあんなに求められていた女性の性的自由、性的主体性がついには確立されなかった現代を嘆息する。

女性が純粋に欲望を求めることは、なぜそんなに困難なことなのだろうか。それは、日本の場合は、おそらく、性をいつまでも語られない存在として扱う風土と、ジェンダーギャップ指数105位の強固なジェンダー構造の影響ゆえのことであろう。それに加え、欧米のフェミニズムや女性の文化は多少なりとも示してきた、欲望のために行動する女性のモデルがほとんど存在しないことも影響しているのではないか。その意味でも、フェミニズムの文脈でも、フェミニズムの文脈でなくても性的に解放された女性のモデルを提示し続け、フェミニズム的に否定するだけでなく、そのフェミニズム的意義を常に語り続けていくことは重要である。

(2) ある現象の持つフェミニズム的政治性

GTO'sのこんなエピソードもある。GTO'sに続く若いグルーピーらにたいし、レッド・ツェッペリンのロバート・プラントは、その軽さを指摘し、「ばか騒ぎをやるとなったら、GTO'sはおれたちに負けてなんかいなかった」と語っていたとのことである⁵³。これを、男性に認められ「名誉男性」となることでホモソーシャルなロックの場に居ることができた女性の問題と見なすことも可能であるかと思う。しかし、本書にあらわれる会話などを見ると、たまに登場する女性を蔑んで扱う男たちのみならず、音楽的にも人間的にも性的にも彼女らに対等に接していた男性たちも多く登場するよう感じた。それは、個人と個人の関係性の下、男女がともに自身の欲望のための主体的な性的快楽を愉しんだ一つの現象と見なすことは楽観的すぎるだろうか。そして、それが可能であるなら、奇しくも、ウーマン・リブが求めていたコミュニケーションとしてのセックスが具体性を持ってくるのではないか。愛ではなくコミュニケーション。私は、このことと性的欲望は相反しないものであると思っている。異性同士であれ同性同士であれ、どんなプレイであれ（激しいものであればあるほど）、人間、個人としての相手と向き合った上でしか性的関係は結ぶことができない。そのことを忘れ、動物的本能

⁵² 北原みり『アンアンのセックスできれいになれた?』（朝日新聞出版：2001.8, 189）

⁵³ Des Barres, Pamela, 1988, *I' M WITH THE BAND*, Jove（近藤麻里子訳『伝説のグルーピー』大栄出版：1994.7, 348）

としてセックスが存在すると思うことは性を貧相にする大変稚拙な考え方であると思う。欲望とともに敬意を、当然のことである。

男女ともが敬意を持った関係になることは、ジェンダー構造に挑むフェミニズムの一つの達成目標である。荷宮和子は、バブル期の女性社員と男性社員との関係について、成功する女性を妬む男性もいたが、若い世代の男性の中に頑張る女性を応援する空気があった⁵⁴と述べていた。ある具体的な現象がフェミニズム的政治性を持つかどうかは、それにたいする社会の反応とともに判断する必要がある。反応とは、社会意識の変化であるかもしれないし、あるいはバックラッシュであるかもしれない。それら（GTO'sの生き方、女性の社会進出など）により、男性の意識が変化したという現象が本当に生じたのなら、その反応は、それらがフェミニズム的政治性を持った現象であるという一つの指標となりうるのではないか。

ある現象がまるごとフェミニズム的政治性を持つものでなくてもいいと私は考える。矛盾し、混乱し、模索して生きていく人々の営み中で、フェミ的現象は評価し、そうでない現象は批判する。この繰り返して社会は変化していくのではないか。いつでも、一貫していなければならない、矛盾してはいけない、と強制されるのは弱い立場のほうだし、ある程度同じ方向を向いた人々同士が相手の矛盾をつきつづし合っていくのは見るに堪えない。

女性の欲望の実現、そのための具体的実践、それらにたいする向き合い方を、私はこのように考えている。

5. 2013年12月17日

昨年の暮れに、京セラドーム大阪で開催された、ザ・タイガースのコンサートに行った。ザ・タイガースは1960年代後半から70年代はじめにかけ活躍した、グループサウンズ（以下GS）と呼ばれる日本のバンドであり、還暦を超えたメンバーが再結成し今回の公演となった。当時のGSのファンは女性が大半であったが、彼女らもまた、男性ロックファンや世間から、ミーハーや「二流のロックファン」と、みなされていた。

私は、当時の熱狂的なタイガース・ファンである知人と一緒に参加した。私はGSに関しては完全に後追いファンであるが、60年代の洋楽が好きで、その延長線上のような雰囲気やクオリティを感じ、好んで聴いていた。当時の洋楽を个性的でしっかりした音でカバーしているGSも数多く存在した。

実際、このコンサートの前半も、60年代当時のコンサートでも演奏していたという洋楽のカバー、後半は日本語のヒット曲という構成だった。前半が始まり、気づくと、英語詞の洋楽を、知人も、その周囲の女性たち（おそらく来場者の99%当時の女性ファンであったのではないかと思う。わかりやすく言えばドームが「おばちゃんでぎっしり」。）も、皆が口ずさんでいる。思えば、その知人と初めて偶然タイガースの話になったとき、ローリング・ストーンズなども聴くような話を聞いた。80年代の耽美的な洋楽ブームはなんとなく知っていたが、60年代の女性も、洋楽ロックを聴いていたし、洋楽のコンサートやロックバーで知り合う年上の女性たちも、やはり人生のどこかでロックを音楽として楽しんでいたと語っていた。ロックは決して男性だけのものじゃない。

コンサートでは、知人と、今日初めて出会った周囲の当時のファンたちが、「人生いろいろあったけど、今、もういちど、この場にみんなでタイガースを観られたことが本当によかった」と、当時の思い出などを語り合っていた（私には「当時」がないので蚊帳の外だったけど）。音楽を通じ、女性同士が関係しあえる。GTO'sのメンバーも、最近ではSNSなどで頻繁に交流しているように見られる。純粋に性的欲望ではなかったにせよ、ロックへの欲望、ロックスターへの欲望を通じ、女たちがつながり合う、しぶとく生き抜く（これはGTO'sの生き残りメンバーの交流に関しても強く感じる）ことの崇高な政治性に涙する。

今回、性的欲望も音楽への欲望も、その他の欲望も、あえてあまり区別せずに女性の欲望の問題として扱ったが、それは、〇〇が欲しい、〇〇したい、という女性の気持ちという意味では根本ではつながり、また、社

⁵⁴ 荷宮和子『なぜフェミニズムは没落したか』（中公新書ラクレ：2004.12）

会がそれをどう「排除する」かにも一定の共通項があり私は「そこ」を知りたいと思ったからであった。かなり個別の事象のみの扱いとなってしまったが、まずは、貶められてきたグルーピーに関する本に女性のエンパワーとしての側面があることを見出したかった。また、金や名声や権力への欲望にも今後目を向け、〇〇したい、という女性の欲望が、女性同士の絆を産み、ジェンダー構造や資本主義といった社会を反応させる。楽観的かもしれないが、そんな場面にこれからもどんどん出会いたいし、それらについて考えていきたいと思う。

【参考文献】

- 荒木菜穂、2007、「とあるフェミニストの『洋楽萌え』体験記—あるいはアメイジング・ジャーニー」『年報「少女」文化研究2』「少女」文化研究会、114-123
- 、「第二波フェミニズム」(大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編『現代社会学事典』弘文堂 2012)
- Des Barres, Pamela, 1988, *I' M WITH THE BAND*, Jove (近藤麻里子訳『伝説のグルーピー』大栄出版 1994)
- Findlen, Barbara, ed. 1995. *Listen Up! Voices From the Next Feminist Generation*. Seal Press.
- Frith, Simon, 1983[1978], *SOUND EFFECTS : Youth, Leisure and the Politics of Rock 'n' Roll*, Constable (細川周平・竹田賢一訳『サウンドの力』晶文社 1991)
- Heywood, Leslie. 2005. "Preface". *The Women's Movement Today: An Encyclopedia of Third Wave Feminism*. Greenwood Press: xi-xii
- 北川純子「日本のポピュラー音楽とジェンダー」への展望」(北川純子編『鳴り響く<性>』勁草書房 1999, 1-30)
- 北原みのり、2011、『アンアンのセックスできれいになれた?』朝日新聞出版
- Minkowitz, Donna, 1995 "Giving it up", Rebecca Walker. *To Be Real: Telling the Truth and Changing the Face of Feminism*, Random House.
- 溝口明代・三木草子・佐伯洋子編、1994、『資料日本ウーマン・リブ史(2)』松香堂書店
- 、1995、『資料日本ウーマン・リブ史(3)』松香堂書店
- 荷宮和子、2004、『なぜフェミニズムは没落したのか』中公新書ラクレ
- Oakley, Ann, 1997 "A Brief History of Gender" Ann Oakley and Juliet Mitchell, *Who's Afraid of Feminism?: Seeing Through the Backlash*, New Pr.
- Snitow, Ann and Pat Califia et. al., 1986, *Caught Looking: Feminism, Pornography & Censorship*, New York: Caught Looking, Inc. (藤井麻利・藤井雅実訳『ポルノと検閲』青弓社 2002)
- 田中亜以子「ウーマン・リブの「性解放」再考—ベッドの中の対等性獲得に向けて」(日本女性学研究会女性学年報編集委員会『女性学年報28』2007, 97-117)
- 田中美津、1970、「便所からの解放」(『いのちの女たちへ—とり乱しウーマン・リブ論 新装版』現代書館 2001, 333-347)
- Wolf, Naomi, 1993, *Fire With Fire: The New Female Power and How It Will Change the 21st Century*, Random House.
- , 1997, *Promiscuities : the secret struggle for womanhood*, Random House (実川元子訳『性体験』文藝春秋 1998)